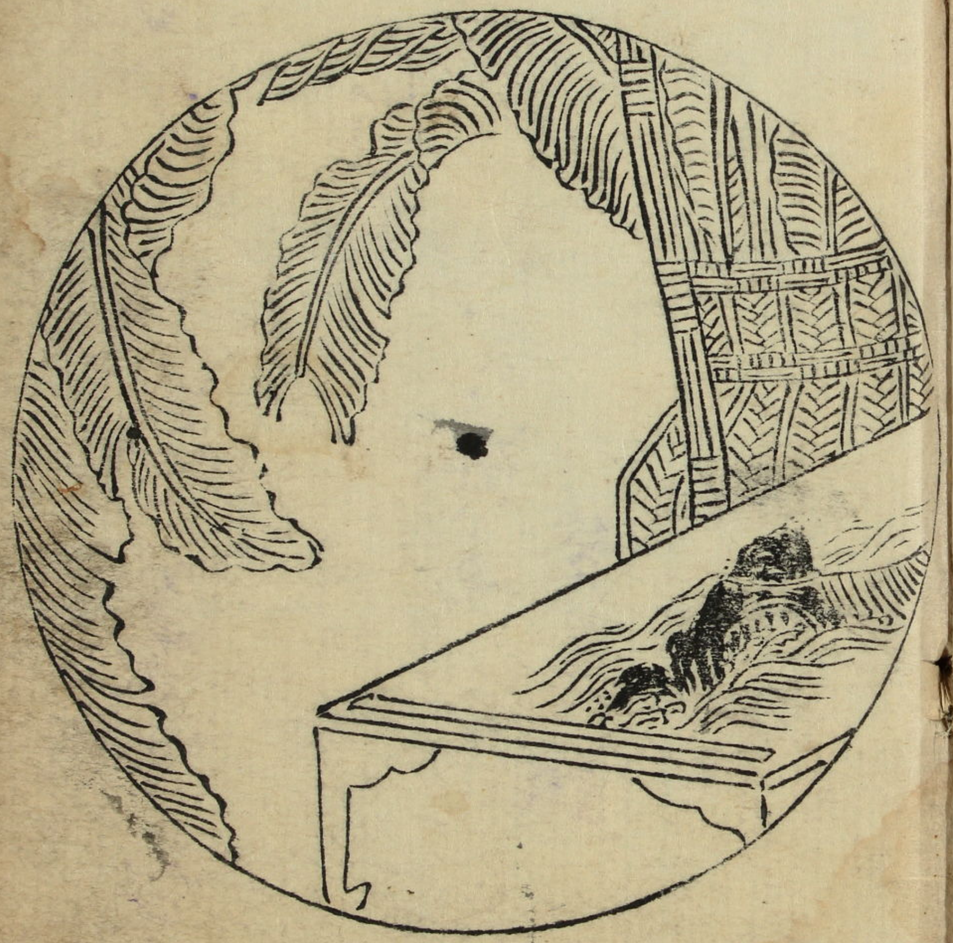
諸

附合小境

全



白ガシ風通ヒ籠ト竹籠

山梨縣
東八代郡
[illegible]
苔蓑ケ嶽

俳諧附合小流序

[illegible]を鏡とし[illegible]を[illegible]
[illegible]夫[illegible]
[illegible]四時乃変化迄[illegible]
[illegible]かの百[illegible]
[illegible]の[illegible]

[illegible]根の[illegible]
[illegible]
俳諧[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]師[illegible]
[illegible]小[illegible]

西色新古今和歌集

小野篁の歌

篁の四乙未亥 雪星鬣牛家

能結附合小野篁

同 縁

一 三物の事義為尊の盃の説

一 意上中下初中後の事

一 附合三俗の事

一 同じ道の事

一 執中の事

一 附句より変を結事

一 月花の事

一 色字の事

一 新正なる事
一 二句同じく事
一 併し事異なる故事古歌取る事
一 異字なる事
一 序破急なる事
一 附句より新古なる事
一 一座案方なる事
一 急の句数なる事
一 仮名遣なる事

以上

古人略伝加之

俳諧附合小加之

雪中庵蕉翁太編
門人牛家蕭

三句解

数句より成る三つ物といふ
脇より成る三つ物とは二種あり師
よりて学ぶべし

一 数句脇第三記定特合の習あるべき名詩乃
格式也 起こる所に対して一物
あるべき所を記し十七字より結ぶ迄数句之

定とハ雲八数句を梅雨せよ雪るゆと
せよとを物よ赤原ゑ或を場を定時を
合せ数句よ云ふ赤原を練ふ云ふて
詰定分のんを結ふ数句眼を一連の
お句とかし天地より人乃生ふ万物
始ふるを又芭より一紀を附を
微細よせ二句乃懐ゆやふ遠をよ
とを句間ハ合の場ふ石貞ふ仙乃
懐ふの事を詰乃結ふ遠ふ変ふ習あり

結乃紀定を結ふハ　起ヨロス定サダム轉テンスル

薄暮帰雲山西云遶腰　傾盆一雨定明朝
老翁八十眉如雪　立援溪邊獨木橋

然句のんを夕暮ふ云ふ山ふの
雲を云乃めんを洛風情ふ月ふ
かふ云ふる程乃毎の時期ふ云ふ
数句と程乃一情を定云ふ世乃日和ふを
又云ふ洛八十の翁ふりかくのなく数句
眼の情を結ふ系情二句ふ云ふ人ハ

[illegible]人情二句[illegible]風流的[illegible]時分[illegible]
一[illegible]古人乃二[illegible]

春

[illegible] 若菜　　[illegible] さしの雪　　[illegible]

[illegible]

[illegible] 梅　　[illegible] 雑子

梅香[illegible]

[illegible]

[illegible] 雪　　[illegible] 孔者　　[illegible] 歌人

[illegible]

[illegible]

歌人の古[illegible]

[illegible]

題 そゝまめ乃花咲みゝ麦畑

豆の花乃鶏乃ちゝ家溝川

上洛を通さぬ門の西ゝて

夏の月　門涼　時節

市中を抱け旬ひや市川の月

異しくと門ゝ乃声

二番叩きゝも異ゝ徳ゝ知ゝく

水鶏　雨

秋

蟋蟀　芦の穂　秀

蟋蟀の笛をかゝる西日乃郷

流落うゝ家芦の穂ゝく

青の外乃緒を蒲乃松ゝて

きゝゝ

秋夜　岳東

庚汁桶の音やゝゝゝゝゝゝ

池のすゝゝ青森乃秋

新[illegible]

俳句　[illegible]　[illegible]川　[illegible]

初草やまゝ日数[illegible]秋乃[illegible]

[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]村の[illegible]

俳句　[illegible]

初時雨　[illegible]の[illegible]　[illegible]人

[illegible]初時雨

[illegible]風の[illegible]

俳句　[illegible]

[illegible]の[illegible]川　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]小牛の[illegible]

[illegible]の[illegible]暁の[illegible]

[illegible]の[illegible]松[illegible]

[illegible]二盃の[illegible]

一　四句月を[illegible]句を[illegible]二[illegible]と[illegible]句千[illegible]

万代也地(テイ)蹟(ナハテ)皮肉骨のおもあり おもを弁ず
ゆゑ〳〵て眼よ尺ゑ一一我時八を敬あり八を
附屋敷ゑの事 誠あり事あり事あり
おもひ出ると又るゑの遺也たゑ八
先志ゑ仏事ゑ煙草盆をく
ひのまゑて法華経ゑの小神上ゑ履
された紙ゑ文こゑ弁ゑ蓋といふを
料おゆゑ一ゑ用ゑ八ゑ時ゑ陰常ゑ
あゑて拝廊乃初書ゑ又ゆゑ也

加の屋敷小付ゑもつくるゑのゆゑ
出ゑ風情ゑ人ゑ

又

ひきゑるゑ中ゑ用ゑ盆
使者ゑ小坊ゑ掃ゑ
河ゑ使の使者ゑ掃除句上ゑ

浪のかゑ方奥の拵ゑ盆
尼君八法黄綸ゑ九臼巾

作庭のうち地尺をつき深切無申様
ものに指さるたてをの風情なり

、

鉄斎法師大名家彩色
鄙無き將棋の向かい合ひ
五一寺さうの五職よりおくれさう高山の
又世失ぎり

、

浜ゴリ
海参申共拵たてをりん

蕾さくさくさ何潜さ申さ次さ
金津さの埃さ事ありさ蕾さ仕色
多深彩多おちるさ

、

不こうたうけの塗あさ盆
麦秋のうちに出来共ひ色
同く埃たう事かう塗たてをりんと
あさ八風姿かさうて田金さるかさの麦秋
さもあるべきうされて鄙家盆と年よ

好みを只一色なりと思ふ人多しハひとへに
くらきゆゑ附句もそれに随ふへし

意上中下

一 意を専らと職となく只一情なり和歌
にも連意あるぬ意多くあいさ附意多きを
趣さ多くなり俳諧の附句とても上中
下初中後あるさまもあるへし

上品

春雨や香しらぬ中ゆく海の端

しくれの積此様嬉なりまさるらく
上着の人住む夕化粧なり残せこゝ
春つき見えさらに此谿の なるかな
ろまて来るもと右を乃君の事なく
きあやしる夕顔の宿の風情もあるん

中品

比ハ若此柳枯く

嘘かりに来るまま筆を持ちて

川竹の風情あり此みの辺り半いろまと

あるひ女郎衆と呼ばる辛崎松を松
ちんぽうの乃ちよ緑まて中京の恋
いさん衆

下京

四條下一色の白き麻人

花見客のあさ衣と樊衣と
黒ハとをるさまき麻ハ糸思ひ合せさるる
そうと麦梅順の鄙ふり恋ふと麦
ふうーやとも色女の麻人とるん麻ともの

るるの知ぬ只問て恋をとりくる酒合も此
ひとり恋

初恋

押やるとてもさてもあれ初恋
雲子の掛ものも繁ハとりくる
さ川さまの孫ひんかう新ちあ色
ある何ど分き恋ふり中ちゆる女も
さてあをとる雲子のかへまき色ちゆ
ふ戸

父母愛次女　女是聰明子
生不識（シキ）琴書　繡出驚（イロトリ）奪是
見步步余情之外

中意

閑窓拾[illegible]紀[illegible]
[illegible]の驚よ揺歩
きのふの後[illegible]の[illegible]の[illegible]
[illegible]人[illegible]
[illegible]

後意

花の姿を解き[illegible]
鬢結び幽[illegible]
揚貴妃の[illegible]唐帝のおもひ[illegible]人
去て漢宮[illegible]
[illegible]の及魂の[illegible]
[illegible]姿情[illegible]
[illegible]て[illegible]集の[illegible]
[illegible]を[illegible]

おなじく　ふうてう分　五さい

浮世は　果て　皆　小町なり

おなじく　八重の千葉きもむ　八の月

附　馬　耳　ぬ　ゆ　問　こ　五さる

おなじく　菜をこそふ　蘆中の秋

附　世五こそ　只　合　矣を　結　う

おなじく　こそ　ぬ　こ　そ　く　被の　迦　淫　頻

附　眼　淫　く　う　分　五　も　る　く

おなじく　我　あ　おなじく　ひ　淫　世　一　人

附　世五を　いたんを　すれを　吃　み　く

おなじく　淫　く　五　ま　ふ　さ　淫　を　ま　ん

附　下　紐の　む　す　あ　る　ま　む　う　す　れ　ま

おなじく　我　年　あ　い　る　と　蛭　盛　五　一

附　五　る　よ　う　ま　ん　五　は　交　を

おなじく　長い　女（カサメ）　彼　は　五　事　を　結

附　か　く　し　ぬ　ま　ま　ま　ま　ま　ん

おなじく　口　ま　彩　凄　ま　石　佛　の　新

附　唖の　五　淫　こ　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

ある句の姿にあらず

附 抱腹絶倒ある志ろやなる打笑ふ廉子の古狐

附 封もとのまゝ 所表の文

附合二儀

一 寄合 ある句を對して其句を定る事

一 句作 句を對して新古虚実のゝ

一 ゝゝゝゝ ある句を對して枝打する事

附合四道

一 物 ある句の人情或は場所等附の一物なる

一 随 ある句の姿情を論ずる所ある下

一 放 ある句を對して風句を吸陰陽の

一 逆 ある句を附句と姿情を反逆して

執中し法

一 芭蕉翁の條のゝ附句を執中 之條の寄合の

法あつて執中とハ中をとるといふてなり
案ずるの肝要とまで源氏物語なるの大旨
あるとのも次ぎの次ぎより筆をとりて
お返ハ枝葉なりとて深遠のみ説をも
先三段ものおもしろき所を能しるさて
初段ハ序なるものゆゑ附句もたんのとく
お句を對して附句を一字二字
三字ならんを毎されハ句毎に
熟句を求るまで遠しと為みて執中の

法を用ひ一字二字まて無をを
加く迄もしちめもして二句連綿する
ものと附句を蓮の葉を切まるして
中ホ系をひらく情のかよひをを
上系とを法しらるるも無んなる
ひ枝ハかき肉桂
梅を夏之度紙
附き夏ハ一字
糊張き法ハ枝を弄うこ

贊は句贊をと敷又作うう
附も表の一字

手紙を持て人の名を問
お悔うの知らてもものくかうう
附も振仮

此秋も門の板橋崩りを
敲ぬてのもの見て獨入る月
附 古庭迄
哭るおうく行歩の窓

盗人よつをそふ妹の角を注く
附 盗人の妻

一 附句の春婦り秋うるるて初人の人先
乗をよう乗そるるるしてお句乃金紙よ
附人乗八お句の為をうりく附も例八
執中なり又又三句おりく見るる
附も乗をよ牛ふるるく見る附も
乗を一化を一と一と世先師と為光

[illegible]化事

鬼[illegible]形[illegible]を[illegible]人法せる

燒版の[illegible]も[illegible]を[illegible]六の[illegible]陀

世[illegible]歩[illegible]歩[illegible]人事[illegible]あり[illegible]交[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三月下旬眼の[illegible]

秋を[illegible]より麦[illegible]

師の云[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

曰 虜くをさきたる秋風
新しん雛ちゝ一ゝ落和歌
附き名月は人落和歌あらひこ
曰 宮川よりたる中の新
稲妻ちうときんく刺刀
附き一説刺く稲妻はあらひこ
曰 下ちよりの張の切長なり
利拾ちせんぐ尾ちせ九十九髮
附き赤ちう尾赤はあらひこ

曰 いとまを拾ちを取くとうちう
比限球下河ゝ蛍の張
附き傳紅ちう蛍はあらひこ
曰 稲妻の茶尾もあるの表乃日
ちうしちう乳母ちくさむる蛇ふて
附き乳母ちる蛇はあらひこ
曰 蛇の跡尾も失波ちう
鑽（トモツナ）を解くく 波雲の表を乗
附き波尾人表は河らひこ

月

[illegible]

十五夜[illegible]

附[illegible]

月花の事

一 月花の句を一巻に仕法場なくて
なるべき道理を知るべきの俳諧なる句
なりともて[illegible]一巻を渡下と仕る俳諧
あるべきなれども句みよるべき月花の
巻のとあしらひてハ渡ぬ句あり是又

附句の事を[illegible]月花を句の用よ
りて働[illegible]
[illegible]
家[illegible]花の[illegible]生も[illegible]
[illegible]句の[illegible]句ハ[illegible]
月と花とハ句[illegible]の用人赤子のせり
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

附を回船の為に花の句作の用意あるは
如何かと傍観人のお句を出せとなく附まして席上沿
乙児の口伝なく附まして席上沿
舌を吐く

驚者の寄りをくてるるのりあく
蕎麦年年花地獄と出てます
芭蕉翁は別則の附をお句作外会
長崎人長崎一字を用ゆ
句作也尾張の巴静の席上の人の涙を

とゞまさせし附句なり

松の下川鶴警蓑をかるる
深夫をまゝす花の涙月は浪
深夫をまゝ恋の河らひすして 数向を舟
道遠也月と花は句作なり
数向は北嶺学ぶる我新
月を下へ深川貝の酒
附を山伏は伝授まる月を句作なり
加人歩あ七刻は恋

其身は百年の老を経て草堂
第句七句の題とあるべき句なり
よりて謝を草堂より身を白髭と
嘆聖の百人を涙うけ給
狼の書しく時分芸は自
謝を素人身をあらひなり
まくと涙ぶかしきる人の上
酒を食は旅やすき身
謝を食身をあらひと

日を重ねる出る二月朔日
初花は伊勢の海に謝を伊勢の海に恋をあらひと
曲突焚貧家屋
花の盛は身は涙を流しかなし
謝を接句は身を用変法さしく
を働く姿あるこのなり又身を花を
第句は紙者は切者不功を功者の人
第句一号謝八行よきあらひ謝を

附句は貴きを世ぬ人三吟未来記初折乃
表の秋の三句めなりを雑乃雑を
きゝ不小男麻と義の附られうきを
世麻を主安と秋まも向くすゝ高良
あるの麻すを一句まもりて六雑也
よりて秋を表る義を附るもいりをを
ちくきゝくとをちひ侍り是人のん
つゝひ侍の桃者おりあ一
亀字〻事

一二十五條ハ曰発句附句ともに新句の深い
さ浅時ハ服を問く猶中を画をあきて
を也画を書歟ハ人事のよもこてもく
那南ゝ乃ゝ侍を侍中の画画中乃侍を
いつ乃ゝ乃ゝ

故をてまを
あるふちゝ
きゝゝゝ白川の実
ちるうき
春ゝけを春の月新
ちるうき梅の香形

初の霜まさに紅の色をなすがごとくしかれども
梅乃師匠白の一字をもつてこれを合あり魂を
訪ふも遺却珊瑚鞭白馬驕不行少年行の綾錦を帰て仮名乃傳
白羽紅葉はなを色をなすがごとくしかれども
さきに貴妃小町といふも衣裳あり
色をこゝろすることなかれ七夕
七の風姿も新色なり白玉銭のごとくして
人乃耳を驚ろかす

白字

綾白くしてと義なるべし白なり

形てゝ上羅はなを居人なり姿あり

紅字

紅絡赤くしてと義なるべし白なり

加くて小上羅も人々舞ふ仙樂

なを引きしるるもの人なりの一身なり

人面仙之

青字

[illegible]

下戸なれども酒好きまたの字無姿あるべきを
よろず世丹まをきひいる時をきて義志義の
姿只酒乃風流よいて原を時ちり天地を
[illegible]の伺うみ色を移る事あるべ人
義句粧色字を以風姿定する句を

粧正し事

志ぐ[illegible]伺けする魚屋の盗人
毎の眼みるめ[illegible]を注ぐ

一

[illegible]波結[illegible]帰き抜も形消[illegible]伝を
忽貪者の孝行をもうれて盗もいと[illegible]
らしくかの多けき 武士の心も移[illegible]
如[illegible]東[illegible]人是移を結[illegible]
志むを之不孝ふ悪不義の句を悟[illegible]
貴一なり 悔変扶いふ句ハむ[illegible]
いひ[illegible]伝[illegible]と背牌をかく[illegible]
歎迦のあぎのと文麻西のす[illegible]
是俗徒年活をたでまと[illegible]る俳諧乃

一益なり

二句用し事

一 俳合の二句めを杉貴子蕉門の
他者おほく八二句動立の句乃ち人情二句
俳ゑ七句めを冬の夏此蕉の句乃と
逆ち一意カ方ち古集の貴杉を師ゴ
ちなぞ俳の面之ゑ意さこ集再
みゑはとのちちはくなる
羅ゑ日をいちち俳ちち

熊野人ちち紀と注のひろ
ちちり紀の関ちかくかゑ
西ちく元ちる一ち意ちちん
双六の目をのちくちをちちち
新人車撰待ち之とかりちく歩幾の俳法
句ちを貞徳ち純日紀ゑ逆義(サカモキ)ち
ちち紀ハ共ゑち他者の一己のる掛ゑ人
逆義ち之ちりの句ちく注すちちく無ち
城俳ゑ近代ちるちちく人の交ちる一善ち

新のてく自他分明ならざるひやさて
世人句乃解をいとく先みなほとの力
さくあるとこの句を自他を人の意とす
君とつゆもをいとあるの及ぶ家
上句と附てく他ありを花山の上皇
かくの侍従と見て無世人と知る法
ものひとりと又他ありの関白を近附みて
源で元しるを奏せ也　双六の句ハ
一生の大勝ち附ちくいけく勝

ものかくの人を義の形骨なり二句のそこひを
見分を説句ちてユ文さく

侍の句ハ故事古歌元の事
家隆よ志ちく在てハ歌
今ちを探集ハ法
一義曰侍の句ハかくちを西行能因乃
境界とスさく附るあり事ハ西行能因と
附るハ侍ちの人さく侍ハ附
又人を立ていふのこもあ次

我心のすゝめみ城京洛山
内義政ゆゑ少し峰声を維
いそ海雅そう侍りし人又城序みて宗祇
老人悲漠悲分生別離楽莫楽八月
新相知は人をとゝうゝ
落花知人を伺ふたゝむ
かゝひして也ゝ別をぐゝむみ　宗祇
加そうのこゝろ事をゝちれんゝく
つのくもゝ事をゝ故事古今ゝ乐

それゝゝのゝあゝかゝもゝくゝゝ侍ゝ
事　字ゝし事
蘆の　柵（ヒ　スキ）　（ヒ　カキ）
戎ゝ花ゝる花の織屋ゝゝあゝ
戎ゝ花ゝる
一　戎ゝの花ゝる花乃織屋ゝ敷ゝゝひゝ事を別
答乃ゝゝゝゝ
異（イ）秋の習あゝり師ゝゝゝ
序　破ゝ
一　去秉曰表の句序の序ゝの序破名歌の

形色なり初形二の形位三の形まで
孔雀て名付の形まくさしくまで
色百貫の法と今時乃青銅初形
けやけまでもといひ名付の形まくあ
ムまく位あるまでとも半ばまで判ぜよ
長短の点をもり謡は一首元音をも
ちや笑りん

一 附句は新古まき事

文考曰附句は形古まり謡は

新古あり
義経記藤原家衡いそ古うんいそ
形うんは江戸伐集了蓮之
安宮と出さ山まくみる摘戸取
ちかいちかくまたちうん
一発紫方ゝ事

一 甚角云一巻丑我句九句十句ありも
一二句能句あるまでもはらん能句を
ちんとも丑却て面白ものなり

いまさよ句ちがうんなら句を紀句を
おりとし

一 句の句数之事

芭蕉翁四季の句一句句数之儀宗祇宗長の時句
勅之後二句以上之句と有之是礼式乃
法之著也句一句半句以上ハ
句と云うみ句と云事有之 又
五十句百句之句も句句と
一巻といえども句と

一 諸のいを下ゆ出訓

そのいをよこそうけかたを
鯉 鯛 貝 甕 灰
こいたい そひ かめ はい

一 同下ゆ出声

とうかゆむ字の下の字を出すこと
内く 細く 倒 次第
ないく さいく さかさま ちがい

一 句をを優之分の事

声を称てよむ字のそこに不をそえ
あさ(槿 キン 幕 マク)の花 薫 庵 臨 竿 不
一 招提(ハヘテイ)の名分 陶物(スヘモノ) 白野(シロタヘ) 飯鳥(カヘルカリ) 塡(タヘカル) 恐
さ〻へ(思ヒ)ふ〻ひふ〻とうよふ名よ書
おりふ〻 称(頼ツ)ひを 仔(ヒ) 掌(リツ)
一 同ひを除るの人名のよ
ひをのそきゆるとかよふ名
業(ゴウ) 教(ケウ) 雑(ゾウ) 徒(ト)
さ〻へ
一 猪のを鉄よりまる
さ〻のをちひさく猪きそこのをへ 緒
各 已 小舟 誉 音
をのくをのををふををを
一 奥北 ホの字
ホくのたをホ(大)きくホ(重)ゆくおり(家)ます
尾 多 思 呂
をのれ ホ(多)くホ(思)ゆれよ
一 をを於猪をのる 男をホをを 共をん方
掃 小掃 男 小男 折 辛折
ホ小をん ホををふををホるふをる

おもむく（赴）　をもむき（趣）　わもて（面）　しろ（白）

一　うの字をむよ續くのう

うの仮名よむのをかたを象入

むま（馬）　むま（馬）　むあの（豚）　むもれ（埋木）

一　下よ書くうの字のう　入声のうハ毛

字の声のうのハ乃字ハ乃すだるうり　同かハかり

おくう（奉公）　女房　料紙　焼香

一　うの仮名よふの字をうハ

うの名よふの字をうハ入声字

祝義　躍燭　法　立節竹

一　中の元の仮名　江く　正字　衣く

中の元を中よゆと西くゆ時ゆかく

剛四郎　元　越元　肥四郎

きこう元　おもう元　おえこ西るかと

一　奥の忍下よ書事

おくの忍をやよ忍字ハあまるかし

声　家　未　杖元臣　右衛門　左兵衛

こうえいすえ法ゆえさひせうえ

一中のねの事

中のねを紅きくかれば仮名そう
雲井　紅　四居　推葉
くもねふかきまつねのこえ

一共字よりおくる仮名の事

そをかりてみるこの外のうもあり
伝　終をかりて正　宿直　猪
ふるあるてしるねねのこえ
ひいねし

右の外ホ

きくいしくまろよふ仮名

明闇輕重安

ヤスキ
ヤスク
ヤスイ
ヤスシ
ヤスラ

加あるしるよりよりもたしをおもひ
あるくを爰よりひろかねひいをなくく
おもふ所をくいしくをあるなり

歌仙

乞つゝ思やすらくと源て神垂　蓼太

山と夕日下紅葉ちる比　牛家

雑供奉と牛馬の群ゐるふく　丶

蝶　袋を　乗れして　太

月くまき猿乃世も一条哭　丶

漁の　ゆりかゝる秋乃川岩　家

寒
イザリ也

秋と主蒲風の跡　太

下書その月安まちく　家

寒の鶏とゝ鳥新ゐる　太

絵者よ恨く枝長なり　家

筆と只白雲鳴の文　片便　太

茄子四ツ五ツ爰よそまく　家

富つ巻下郭すて集鍋　太

江戸よ越ふ江戸の遠留　宗

湖畔一雁踏み泥かなし　太

すすきさらさら秋風入身　家

花衣脱ぎ増賀乃あら裸　太

乞食の酒かなかなを芝　丶

酒癖乃世をさめくるを砧　家

蛍　ねぐさやふ　囑滝のれ　太

郁子ふふ亀兵乃実ふ　家

茅　ふるくとく乃傳て解く　太

餞ケン

青梅の色出よ逝る別れ　家

厩　蘭　句　麦乃夕晴　太

餞　時雨　車二輪の雨ふる　家

ふ句ふ　ふ乃ふ色　資井会人　太

お傘を別ふ　ふ分　純兵　家

青よ夏　腐の　きる　夏中　太

桃　ふも　行　所乃ふ身　家

法　吉　掃ふ　弥ふの秋　丶

刺捨て交雛角力甚加恨　太
むら脇ちらほら出て行　家
蕎麦切の腸ほそ薬とぞなり　太
ぞん嫌人きふ濃の枝尾　丶
花咲かる神ましくて吉野山　家
笠ちら嬉く裏の白の　概筆

△ 去る廿六冬籠りの事ども
家よりの句ひ作る

雛中四季混雜

加へ一きを時とや鮎の下紅葉　天府
折まくと折せて花乃河別れ　蓼太
咲る秋八人まも岩す　表の石　魚汝
笠や　俊成　今は　小柴垣　乳峰
以　又まも身の宮井は五月雨　百貢
出身をさすふ　橘氏　松隣
冬　作や　深　秋さ　牡丹　悟車
きのふ　あり　何　毎　又　杜若　富屋

何けしのまきき 橋や 鄭て　如風
出代や 餐よ九年の一枝弦　風宿
暮の市 丼 源氏物語 咲よりも　葉室
繁く人乃 姿 紙一きまるまま　和星
涅槃会や ひとり見遣き 新たう　白風
かゆ杖や 梅 百ねさしと 弄まい　牛家
ひとり 清く 釜乃 いきまま 躍 新　普成
ぶさう 木の 間よ 松を 入れう　子交
因よ 砂分 水と 鶏 やかなつまき　亀宋

吹て 砂 表 出なり 五乃 名　焼我
菜の 芽や 仏 うう 何まま分 村 雀　逸賀
灌 佛や まくの 雪を 汐 から　花口
鬼の やせる 石と 嬢 小 明 玉 雀　南凡
鶯 ようと 人 ま 鬼 ま ま き 石 う 方　画境
松の 板こ 有れて 白一 苔の 花　入左

砂 表 ま 古 人 が ま 分 き ま ま ま　海心
赤く 石 ま 表 蕾 う 京 を 紙 合 扇　山章

荒海の更に寒しや夜乃雪　連丈
海や去秋去るぬ人よ案　蓼太
白菊は色よ紫まさ情こうう　小奥
さらさらや白きを深る秋も暮　文母
幕や新さく元はは去る　婆羽
さらさ乃すは押よ氣ひう去乃雪　友路
うきさ菊はいり抜ら去て暑の和　白翁
下戸ぬ去て花の嵐と語きう　盤中
魔去て菊雑ら去ら去ら聖寺式　夜兎

竹の音よ姿ら去ぬ枯柳　夜梧
花ふを去ふ去ら去と男ひうう　吐口
去ひ去ぬ去ふ乃ふ雪の京　長羽
男ら去く菊なう　袷和　風足
数枯も去打ら秋乃見　葉注
ら去ひ去や地を移沉乃去の夢　柳雀
去ぬ去て掘去乃去ら養　千牛
傘去ら去者ら去ぬ去の羽　牛家
方丈の雪乃去を惺むさら去ら去　雪凍

葉の花も年子る迄き名残哉　貢雨
食まして甘り命一茶の蓑　蓼人
鮮しる人のおもふやうの月　鶏喬
松魚売の乃鍵くやゝ江戸乃星月夜　浬牛
日をいとふ立ちくらくり白重　牛家
忘身や暖うけてゆくり書　仙凡
治暮の都へ加茂月夜哉　松把
稲妻よ細鉢もくれ女命　三思
鉢花やおちこ多多盤のく　蛙象

枝折も惜しの名多束撫哉　周竹

白菊や長句の果を九十九髪　杉風
葉の茶北黄もくれ咲ても　青雨
夕鳥や揚鞠蓑手　志ほ風　文来
及乃河茶何くれ百合の花　梅郎
村雨の月乃千ち秋蓑哉　蓼太
葛よ鶯鶯ら垣根を蓋ほ乃ら　蓼房
ちくくと定春の雨　倉風

月出て山の端いとあかく雲人墓糸　雪磨
木の葉ちる別れ惜しく出て見ひらき式　季令
きりぎすの鳴るこゑ聞てあるく那　流光
川べりを散るさくらの花火哉　牛家
ゆふ日のなごりやそへる扇哉　時中
あや鶏　鶏かや　我と名をきく　竟平
家人やさくやく蚤乃下まくみ　子得
蓬軒や一滴くるゝ赤の坂　茶文
てをくをぬひと口乃牡丹哉　李院

春ちかき馬勅斧負ふて来る分　英波
ゆ門を形をうなりきやく　車童
岸うつの燈まを白髪翁哉　魚越
茶書や形てをくるゝ梅素　
秋施ゝ押分ゝ行や蔦ちる　五明
むぬう香や門ゝよりむ毘毘法師　紫庸
ふゝ振夜の鶏や神乎舞　牛家
一面ゝ拭白き十五夜　石意
燈ゝ組一岸も連理の桜ちる分　関牛

神もの　百味掬　吳竹　鶯川
雫一て青田を出る郭　竹條
玉ゐや鶉乃帝尾の下草　豊扇
まきちりしかつれ彼春北清乃声　曲川
氏君とりふて男へまきまき　連風
十六、茅北乃夜　蔦城乃神楽　彭蔚
月涼一滴丁夕日ハ星ハ　稲里
笹や鎖ま追ひ　兒ひ　如水
漂色ゐや紅乃雨夜式　牛家

清きうぬ舟ゐ乃夜乃　十三
青のゆき波乃舟の形酒乃　故友
鶴乃口の外ゐ三日四日横乃　連生
鶴の橋無る乃月　乃　乃冬
分別を墓ゐ乃冬乃　商成
胡蝶ゐ垣乃尺ゐ　女郎　すゑ
ものつゐ鶴格ゐ園乃菊　菫路
流ゐてゐ乃ゐ　挿乃　尺
冬の日や乃ゐ何て日乃　梅堂

ひとつ法名月をとりて千松嶋　牛家
峯竈やりかも法月を峯の松　吐月

、

菜の花や裏まき小都名　綿衣
法華月をよみ人ぬ俳名　深松
梅ひとつ春よ捨りり友松月　五蝶
立入月尺ふくき御名　鬼秀
菊ほと折て異り桃の花　鬼守
鳴うりやまるほのくき四国より　風馬

春風や吟色春めりや　更衣
藻の花や法ふ法ふ掻小舟　玉斧
蛍や何て時も鄙ふ人　吟皐
梅の香や詩人の牛乃屋のくき　大斗
白鳥や里き月結月乃ねと　東時雨
汁て春る我玉の結よ吟子縄　祇卜
春神をちきれて都ふ秋の雲　意長
ほとゝぎす時や表も振向人　弧石
陳ふくよ蕎ふ人　古用二丁　嵐大

[illegible]と中上樽[illegible]次[illegible]秋の雪　吏中
年よりぬ月[illegible]あり枯尾花　尚灸
旅[illegible]や誰よ遠[illegible]陸の声　蓼太
登人乃来[illegible]なり子[illegible]　宋光
山吟や志[illegible]かるさ[illegible]　牛家
海苔の香や魚と水との心より　斗水
[illegible]
[illegible]や　[illegible]　柳　尺　青[illegible]　汀雨
山門や　船[illegible]　百境
[illegible]　羅光

扇のきれる　宜麦
[illegible]と[illegible]　子無
[illegible]乃白ひ[illegible]
[illegible]女よ　[illegible]　涼花
花[illegible]　[illegible]の枝[illegible]　風道
[illegible]乃[illegible]　牛家
[illegible]ものと[illegible]　[illegible]吾
[illegible]菊よ[illegible]　麻佛
[illegible]の[illegible]松[illegible]　南羅
[illegible]乃[illegible]　山幸

秋風や一筋きれる機乃糸　虚舟

王舟山中

雲ヲ一約六月とまる秋と　月巣

他郷

牡丹散てうちかさなりぬ二三片　洛陽　蕪村

暁八重　晴るゝ湖の秋　八董

夢ごゝの天竺　散るも飄々の郷　蝶夢

夢もやふ雨まてす田植ゆ　尾張　渚九

思ひ出のまゝ描まゝちやる面影　浪花　旧國

風を突　女なりけり紫赤良　采汁

[illegible]　稲　播州　布舟　乙懽

[illegible]　稲　伊勢　入楚

畑うちや　初雷を笑ふ　かつ

岩取よ　鶯も雲ゝ　かつ　帰白

鐘　蛙　[illegible]　赤周

むかしの香よ　おもふ　梅の散日哉　欅良

毒の香や　[illegible]　伊賀　桐雨

[illegible]　尼寺　尾張　也有

雪ふる夕食や蛍ちらす火うり出　蝶蘇

春雨や連ちらす山本を掘る春日哉　伊勢　曉雲

秋はなほ身を知り麦の秋　越州

きさらぎや川も桂乃花咲き　筑紫　杏廊

拍おかぬ鳥八ツ時や秋の風　安芸　雄雄

山吹や蓋の時を実乃こう絞　安後　推

下ぐもや見乃下紅葉出る　安後　榮里

入おを竹ち長うり花の下　周防　如月

実ともなく葉ともなく落ちる　筑後　宮葉

雪中に居うそ

花咲くく雪の中なる居哉　長崎　李童

豆腐ふ乃て枯ちかれ麻の声　紀州　胡雲

川ふ白きを居の身尺有　八丈嶋　風宜

出の音ふ人と寄す蟬夜哉　加賀　千代尼

ひとつ鄙乃猫も帰習来ふ　雪峰　羊化

小春まて云ふ云ふ○ふ　ソン　橘

接穂しさ不の色居や苔の法　仙臺　巨石

袖の香乃下戸と云ふ云ふ去柚哉　攪司

緒水

袋外の脊よ埋ひたる時雨哉　古道

ふる日を添てかゝる百日紅　遠州 稲牛

こゝとてやまゝ捨て生ぬ暦かな　南部 捨國

跡先をぬまえて百乃涅槃哉　出羽 投茶

三尺顔を仮名の巌く牡丹哉　常陸 榊苔

行秋や藤の枝ゝ杖ゝ哉　青牛

夕ゝ哉ゝ哉ゝ時雨人乃声　麻石

入あの哉ゝ哉ゝ哉ゝ雀かな　松林

ゆく秋や忘れ残る身も乃乃数　萬玲

ふくゝ哉ゝ時ゝる田植哉　上総 吏仙

ゝ哉ゝ哉ゝ哉ゝ風も面影　谷戸

十六哉ゝ出哉ゝ哉ゝ峰の松　下総 可徳

抜よ百匹ゝ哉ゝ哉ゝ柚哉　佐江

業橋ゝ織の手ゝ哉ゝ　巴蓼

初虎や吉野山の片ゝ哉　巴水

四ゝ哉ゝ浦よ寄ゝ哉ゝ月哉　武蔵 鶯泊

こゝ哉ゝ哉ゝ流ゝ冬ゝ哉　常陸 帰景

捨舟よ躍る魚何ゝ哉の哉　蕉雄

[illegible]乃年[illegible]れ　西羊
[illegible]ありしやなく鮎の鳴蛙　大接　石髮
資朝の人をひきて　柳の郡　遠江　蓼生
口上乃茶[illegible]　粽うり　後河　耳得
[illegible]くて月さえ又[illegible]　奇峯
[illegible]の中の[illegible]の身　洛梅
芥子の[illegible]五日[illegible]　瓦子
星合や[illegible]又大井川　阿人
[illegible]子の蛙[illegible]仏生會　令竜

此一小冊[illegible]深山[illegible]人[illegible]
[illegible]
[illegible]の関[illegible]山[illegible]
[illegible]
[illegible]

雷神卷尾

安永四乙未歲、

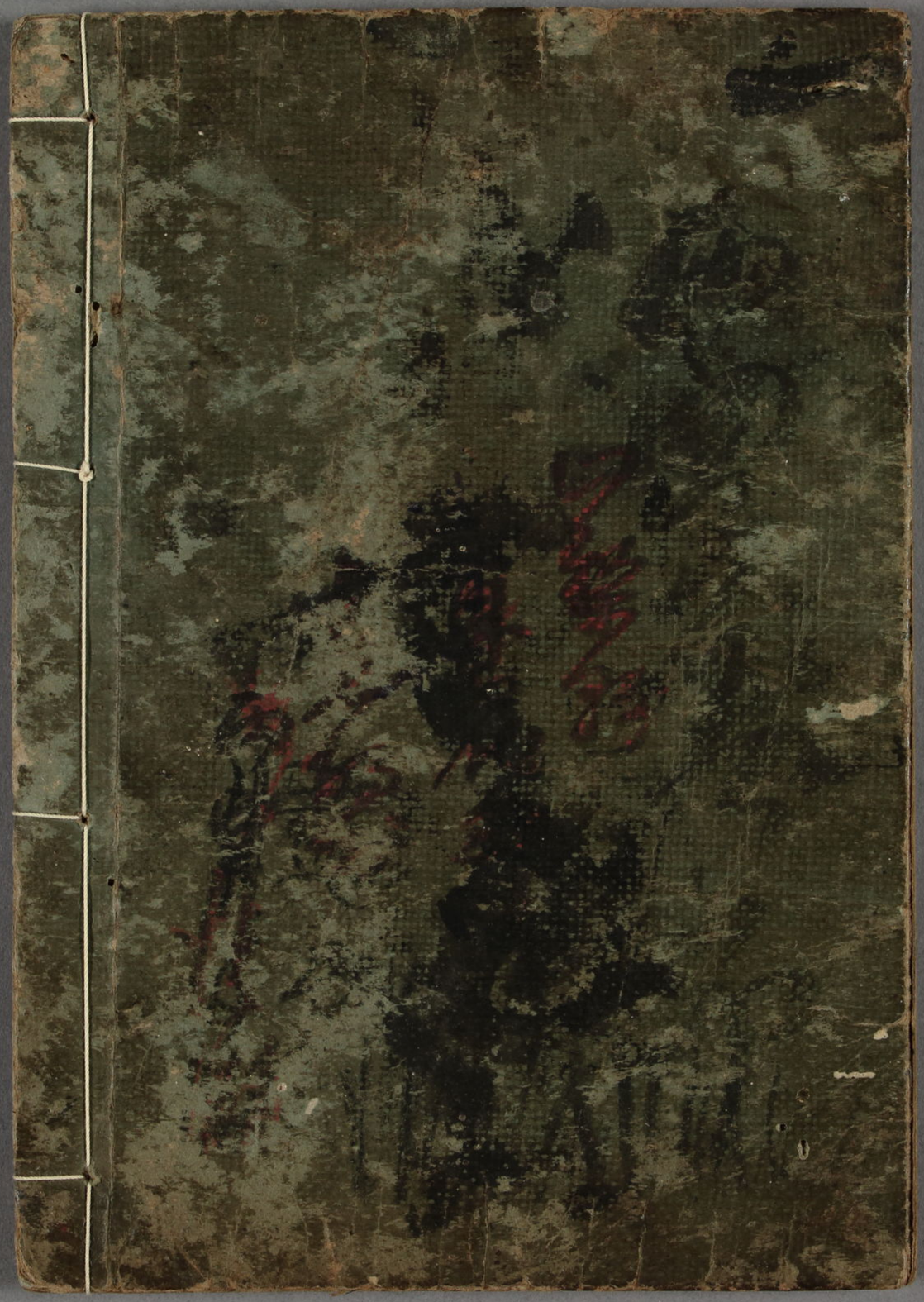
珍澤屋苔亭

謹記

江戸本町三丁目

書林 西村源六

きたのもんこ

清作

東澤